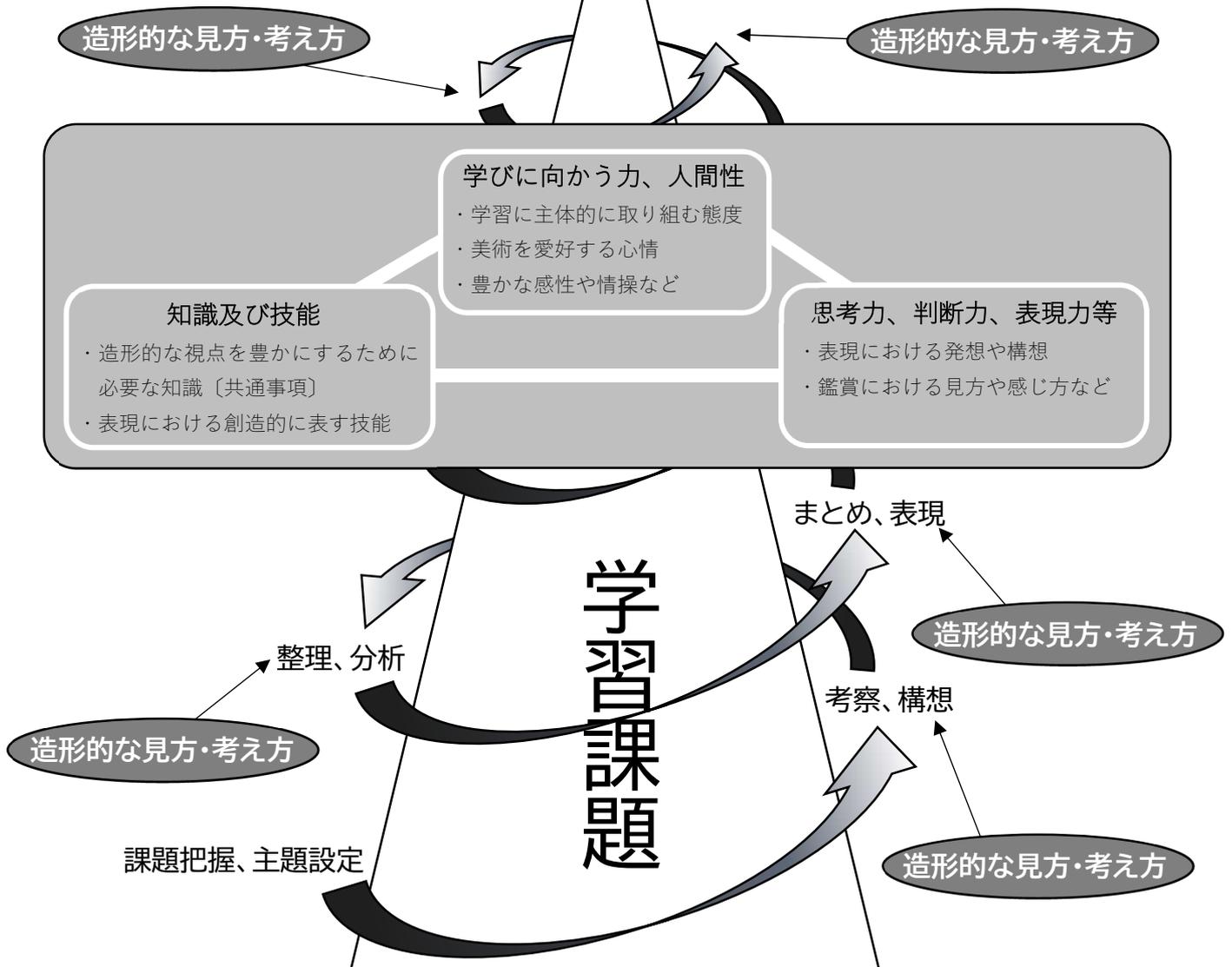
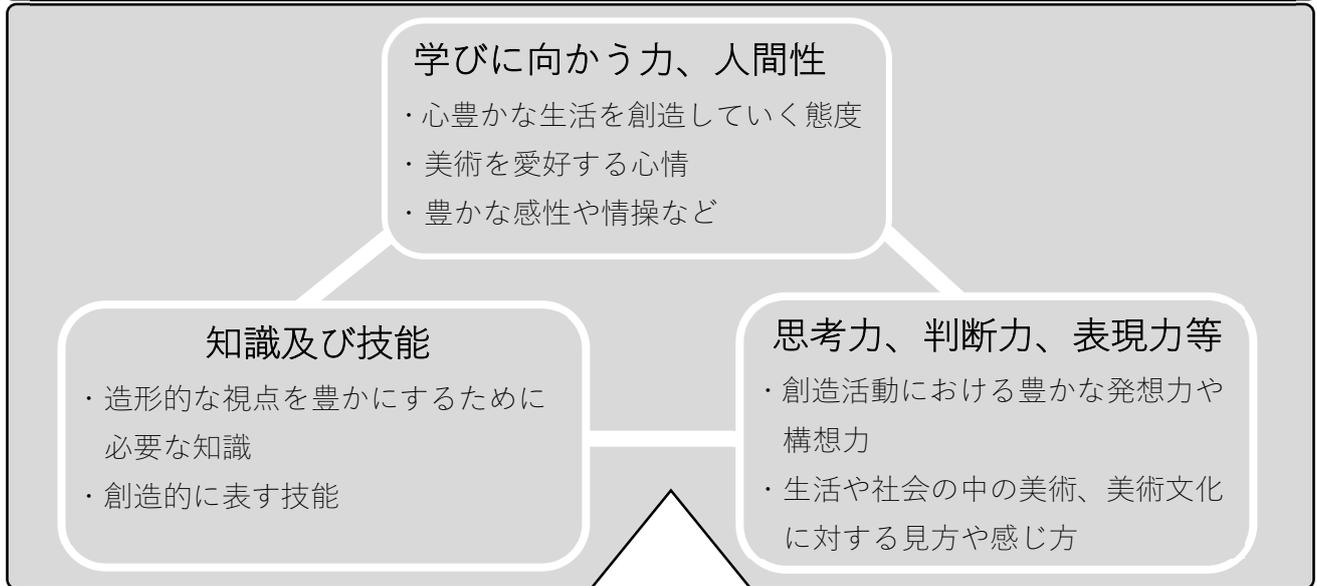


美術科の「深い学び」を実現する授業づくり

生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力

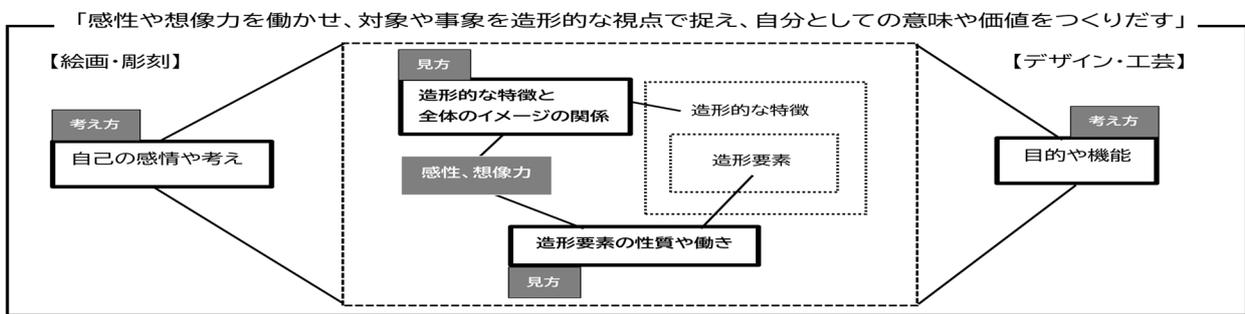


美術科における「深い学び」を実現する単元構成

美術科における「深い学び」の状態とは、「個人の感性や想像力と造形的な視点で捉えたものを結び付け、表現の意図や文化的背景等について、自分としての意味や価値をつくり出すことができる」状態と考える。「深い学び」の実現において、知識も勿論大切ではあるが、芸術科目では個人の感性や想像力も欠けてはいけない要素である。個人の感性や想像力をきっかけとしながら、美術科ならではの知識を加えていくことで、生徒が自分としての意味や価値は単に感覚的なものではなく、美術科の知識を踏まえてのものになるだろう。

造形的な見方・考え方を働かせる問いについて

本校美術科では、学習指導要領解説に示されているように「造形的な見方・考え方を「感性や想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだす」と捉えている。3年次から以下のように「造形的な見方・考え方を図式化した。「造形的な見方」はすべての題材において共通のものであり、美術作品として普段捉えないような対象であっても、この見方を働かせることで、美術的に考察することができる。一方、「造形的な考え方」は絵画・彫刻、デザイン・工芸それぞれの独自性が出るものである。

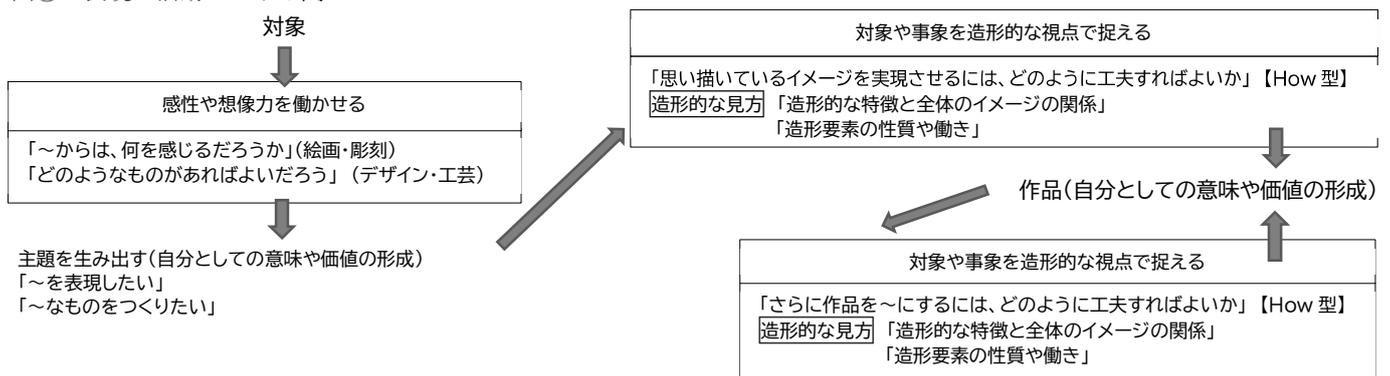


「造形的な見方・考え方を働かせる問いについては、鑑賞と表現の活動に分けて、下図のように捉えた。鑑賞と表現を相互に関連付けた活動の中で、これらの問いを生徒に投げかけたり、生徒の中に生じさせたりすることで、「造形的な見方・考え方をより働かせることができるだろう。

図① 鑑賞の活動における問い

段階	問いの例	
感性や想像力を働かせる	「～は、どのように感じるか？」 「～は、どのような印象がするか？」 【How型】	
対象や事象を造形的な視点で捉える	造形的な見方 「造形的な特徴と全体のイメージの関係」	「～はどのような特徴から感じられるだろうか？」 「なぜ、～なイメージが作品から感じられるのだろうか？」 【Why型(How型)】 ※全体的に捉えさせる。
	造形的な見方 「造形要素の性質や働き」	「～はどのような特徴から感じられるだろうか？」 「なぜ、～なイメージが作品から感じられるのだろうか？」 「～によって、どのような効果が得られるか？」 【Why型(How型)】 ※部分に注目させる。
自分としての意味や価値をつくりだす	「作者がこの作品で表現したかったことは何だったのか？」 「なぜ、～のような表現がされているのか？」 「～とは、どのようなものと言えるだろうか？」 【How型(What型)、Why型】	

図② 表現の活動における問い



1 題材名

実践事例 1

第3学年 時代や社会と美術

—空間を意識した現代アート—

【B鑑賞 (1) ア (ア)】

〔共通事項〕 (1) ア、イ

実践事例 2 研究発表

第3学年 安らぎの空間 —人と自然の憩いの場—

【A表現 (1) イ (ア)、(2)】

【B鑑賞 (1) ア (イ)、イ (ア)】

〔共通事項〕 (1) ア、イ

2 本校の研究と本実践の関わり

本校美術科では1年次から、表現と鑑賞の活動を相互に関連付けることで、「深い学び」の実現を図ろうと授業実践を行ってきた。作者としての立場、鑑賞者(使い手)としての立場、それぞれの立場に立って考えることで、感覚的に捉えたものと表現の工夫、造形的な特徴が結び付きやすくなり、主体的に美術科の学びを深めることができるはずである。

これまでの研究では、絵画を中心に実践を行ってきたため、5年次の研究発表では、デザインの実践を行った。絵画・彫刻とデザイン・工芸では、対象へのアプローチ方法が少々異なる。そのため、これまでの研究がデザインにおいても応用可能なのかを検証する上で、妥当な題材だと考えた。

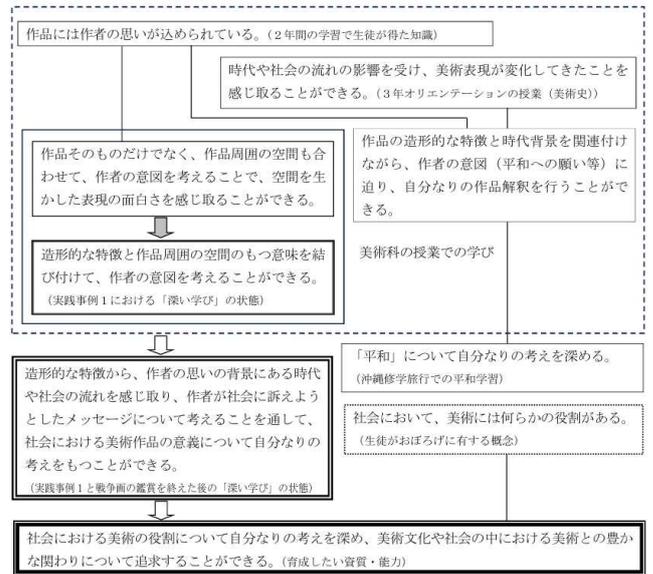
3 実践

絵画・彫刻での学びをデザイン・工芸での学びにつなげ、深めていくためには、どのような授業づくりが必要なのかを検証するため、実践事例1と2を続けて行った。美術科には、すべての題材に通じるものとして〔共通事項〕があるが、それとは別に「空間との関係性」という、共通の視点を設定し、生徒が学びをつなげやすくなるようにした。「空間との関係性」を考えさせることで、部分と全体の両方に注目せざるを得ない状況を生み出すことができる。1年次の研究において、学びを深めるために

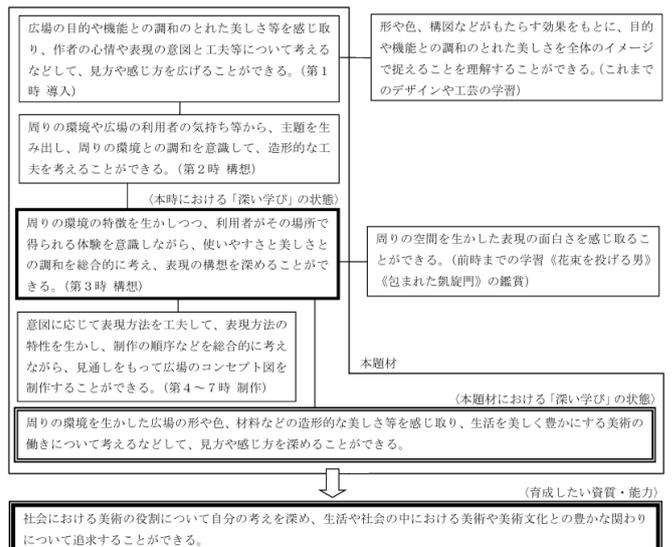
は、問いによって部分と全体を交互に注目させる必要性があることを解明しており、「空間との関係性」は「深い学び」を実現させるために適切な視点であると考えた。

鑑賞の活動で作者の思いや意図を深く考えることができることと、表現の活動において、明確な意図をもって表現を工夫することができることは深く関係している。そこで、生徒の「深い学び」を妥当に評価し、指導につなげていくため、表現の活動後に相互鑑賞の時間を設けるだけでなく、鑑賞の活動では、まとめとして簡単な制作を行うなどの工夫をした。

〈事例1の「深い学び」の図〉



〈事例2の「深い学び」の図〉



実践事例 1

3年次の「時代や社会と美術—社会に問うパブリックアート—」を再編成し、空間との関係性に主眼を置いて実践を行った。沖縄修学旅行の平和学習との関連も想定

し、今回もバンクシー作《花束を投げる男》を鑑賞対象とした。また昨今、イスラエル・パレスチナの情勢が悪化したニュースもあり、生徒にとって興味をもちやすい作品であると考えた。作品の提示の仕方は3年次と変えておらず、絵柄のみのバージョン、分離壁に描かれたバージョンの順で鑑賞させ、場所が変化することで「花束を投げる」という行為の意味がどのように変化するかを考えさせた。3年次のような制作とまではいかないが、自分がもし《花束を投げる男》を描くとしたら、どのような場所に描きたいかを考えさせ、バンクシーの作品と別の場所の写真を合わせることで、バンクシー作品の解釈を深めさせた。この鑑賞の後、空間への意識をさらに深めさせるため、クリスト、ジャンヌ＝クロード夫妻による《包まれた凱旋門》の鑑賞を行った。布に包まれていない普通の凱旋門と、布に包まれた状態の凱旋門の印象を比較したり、凱旋門がどのような存在なのか（凱旋門の周りにはどのような環境なのか）を考えたりしながら、「凱旋門を布で包む」という行為の意味を考えさせた。

実践事例2

多くの生徒が訪れたことのある富岩運河環水公園の鑑賞をきっかけに、富岩運河とつながっている岩瀬運河周辺に「人と自然が憩う場を設計する」という想定で、コンセプト図をデジタル上で制作させた。設計する場所は特徴的な場所がよいと考え、歴史的な街並みが残り、立山連峰や富山湾といった自然の眺望を楽しむことのできる岩瀬運河とした。ランドスケープデザインを考える際に考慮すべき点は多々あるが、本題材では「広場の用途」「周りの環境との調和」「利用者の気持ち（視線や動線）」といった三つの視点を設定し、場所の特徴を生かしつつ、利用者に考慮した広場のデザインを考えさせた。デザイン構想のきっかけを掴ませるため、導入の1時間以外にも構想の時間の前半に富岩運河環水公園等の公園の鑑賞を行った。また、さまざまなアプローチ方法で構想することができるよう、思考ツールを活用した。コンセプト図の制作後は、コンペ形式の相互鑑賞を行った。授業後、実際に訪れたことのある公園を造形的に考察し、レポートに自分の考えをまとめさせた。

〈生徒に示した思考ツールの例〉

【広場の主な利用者をイメージする】(例)

性別	年齢	服装・サイズ	色	他の特徴
男性	若く、スロープ、ベンチ、水鏡	緑色のパンツ	カラフルな靴	足は白く清潔感がある
女性	パンツ、薄着、水鏡		カラフルな靴(写真映えしやすい)	清潔感なくとも清潔感がある
子供	まげ、スロープ、ベンチ、水鏡	緑色のパンツ	緑色の靴	
高齢者	足が白く清潔感がある			清潔感がある

※年齢、髪、趣味等、さまざまな立派の人を想定してみる。

【一つの動作を深掘りする】(例)

【キーワードから造形のイメージを広げる】(例)

キーワード	造形イメージ
花束	丸い、柔らかい、色鮮やか
男	背広、ネクタイ、革靴
公園	緑、木、ベンチ、水鏡
凱旋門	巨大、石造、歴史を感じさせる
布	柔らかい、包み込む、透明感

【利用者の楽しみ×周辺環境の特徴】で考える(例)

利用者の楽しみ	周辺環境の特徴
花見	花見の季節、桜の木、芝生広場
風景を楽しむ	眺望の良い場所、公園の景色
写真撮影	美しい景色、建物、人々
ライトアップ	夜景、建物、公園の照明
休憩	ベンチ、水鏡、涼しい場所
散歩	歩きやすい道、公園の景色

◎各項目のキーワードを書き出す→2個選ぼう→その2つを組み合わせる→アイデアを出す

4 成果と課題

視点① 「深い学び」を実現する単元構成

〈成果〉

鑑賞活動の後に表現活動を、表現活動の後に鑑賞活動を設定したことで、生徒の学びが授業を通して本当に深まったのかを確認することができた。

実践事例1

3年次での実践と同様、作品がある場所を地図で示したところ、多くの生徒がバンクシーは《花束を投げる男》を通して平和を訴えているのだと考えるようになった。そのため、その後の表現の活動において、「平和」を感じさせる場所を選択する生徒が多くいた。バンクシーの意図を漠然と捉えた生徒よりも、細部の表現（男性の影の向き、男性の腕の振りかざし方、花の色の意味、花の色と男性の色の対比）にも注目して解釈した生徒の方が、空間のもつ意味と細部の表現との関連付けを明確にし、《花束を投げる男》を描く場所を選択していた(生徒1)。クリスト、ジャンヌ＝クロード夫妻の作品鑑賞では、バンクシー作品よりも作品周囲の空間を意識して、作者の意図を探ろうとする傾向が見られた。この作品は生徒がこれまでに鑑賞してきた作品とは異なり、造形的な特徴のみを頼りに作者の意図を考えることは少々困難である。しかし、凱旋門という建築物の意義や、作品周囲の風景との関係性を合わせて考えたことで、表現の意味を解釈するきっかけを掴むことができたようである。

2点の作品鑑賞を通して、空間との関係性を意識させることができたが、授業者が期待していたところまで考えを深められた生徒は全員ではなかった。全体共有の時

間には、細部の形や色の表現の意図にも注目し、考えを深めている生徒の意見を取り上げ、少しでも多くの生徒の考えが深まるようにしていた。しかし、結果として効果が見られなかったことから、別の工夫が必要だったと思われる。全体共有後の個人の考えの深め方(振り返り)に課題があったのかもしれない。

〈生徒1の記入例〉

バンクシーの作品は、戦争の犠牲者に対するの献花や、戦争の犠牲者に自分の幸せ(花)を分けているのだと考えた。しかし、僕はその花を投げるといふ行為が納得できなかった。最初は、戦争に対する怒りなのかと思っていたが、どうして遠くに投げようとするフォームなのかよく分からなかった(怒りを表すのであれば、地面に叩きつけるように投げるはず)。そこで、遠くに投げるフォームで表すことができることは何だろうと考えた結果、実際の距離の離れたものに対してではなく、時間の距離が離れているという意味でも解釈ができるのではないかと思った。だから、僕は60年と離れた戦争の犠牲者への手向けとして、この絵を原爆ドームに描きたいと考えた。

※生徒1は描かれた空間から、戦争に関する作品であると考え、男性がもつ花束を図像学的に考えている(下線部)。それだけではなく、男性の仕草を細かく見る(下線部)ことで、さらに作品の解釈を深めている。生徒1の記述で興味深いのは、バンクシーの表現に納得いかない部分があり、それがなぜなのか自分なりに考えることで、深い解釈へとつなげている点である。

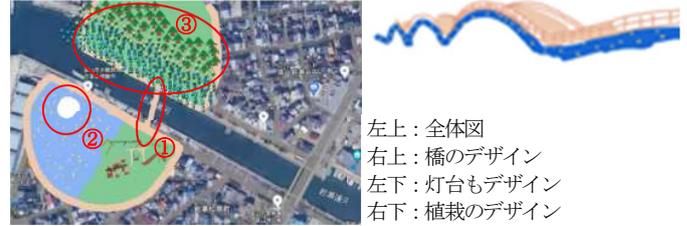
実践事例2

生徒は構想途中の鑑賞を通して、使い手を意識したデザインの必要性に気付くことができた。また、授業者は鑑賞の時間に生徒から出た意見を基に、生徒が気付いていない視点を把握し、構想の時間に個別に助言することができた。しかし、表現の活動に移行した際、造形的な工夫を施し、コンセプト図として表現できる生徒は少なく、施設の充実等、造形的な部分ではないところを考えようとする生徒が多かった。また、作品完成後の相互鑑賞の時間においても、友人の作品のよさを造形的に深く考えている生徒は少なかった。

本題材は、美術作品として普段見ない広場(公園)のデザインについて考えるものだったため、生徒が造形的に考えられるような工夫がもう少し必要だったろう。特に鑑賞の活動において、これまでに絵画鑑賞の実践で行ってきたように比較鑑賞を取り入れ、自然と造形的な特徴に注目がいくようにすべきだった。本題材でデザインの授業を実践したことで、「造形的な見方・考え方」の重要性を再認識することができた。

〈生徒の作例〉

生徒2の場合



左上: 全体図
右上: 橋のデザイン
左下: 灯台もデザイン
右下: 植栽のデザイン



【デザインのアピールポイント】

(広場全体)

- ・人工物はなるべく自然に近いものとなるよう、葉っぱの緑や木の茶色、海の青色を多く取り入れた。また、直線的ではなく、曲線的のものを多く取り入れた。
- ・公園全体の形も丸みを帯びたものにし、柔らかい印象を出した。(灯台周辺)
- ・床や灯台、ベンチ等の形を「海」というイメージを醸し出すようなデザインにした。
- ・青色のチューリップを富山湾に、青色と黄色と肌色のチューリップを橋に、木々を立山に見立てた。

生徒3の場合



【デザインのアピールポイント】

県外からの観光客が楽しめるよう、富山の特産品を模して、遊具等の建造物をデザインした。

生徒4の場合



左上: 全体図
右上: 休憩スペースのデザイン
左下: 橋のデザイン

【デザインのアピールポイント】

(広場全体)

- ・「魚×学び×遊び」をコンセプトにした広場のデザイン
→海の波、森等の自然をイメージして丸っこい形をたくさん加えた。
→海に近いので海らしい透明なもの、砂浜のようなベージュ等、自然界にある色を使った。

(橋)

- ・ガラス製→橋に光があたったときにきれいな模様が地面に映る。

生徒5の場合



左上：全体図
左下：モニュメントのデザイン
右下：遊具のデザイン



【デザインのアピールポイント】

- ・青色ベースのモニュメント、自然を表す茶色の地面
→心が安らいで落ち着ける広場に
- ・波の形のモニュメント
→岩瀬重河や富山港との相性が良くなる。
→涼し気な印象を与える。

生徒6の場合



左：全体図
右：遊具のデザイン



【デザインのアピールポイント】

- (広場全体)
- ・目立たせたいもの以外は四角形等、シンプルな形に
→主張が激しくなく、周りとの環境にも馴染む
 - ・目立たせたいもの以外は落ち着いた色味に→環境との調和(遊具)
 - ・一風変わったデザインにすることで、遊具としてだけではなく、造形物としても楽しめるようにした。
 - ・インパクトを強めたい部分については濃い色を多く使うことで、利用者の視覚に入ってきてやすくする。

生徒7の場合



左上：全体図
右上：展望台周辺のデザイン
左下：クロスカントリーコース周辺のデザイン



【デザインのアピールポイント】

- 素材でシンプルだった岩瀬を現代的で一風変わった雰囲気。 「小さい漁船が並んでいる」というユニークな特徴を活かし、視覚的に面白い空間を生み出す。
- ・遊具のアスレチックや展望台の周りが木製
→木々との一体感が出る。視覚的にもリラックス効果が出る。
 - ・ビビットカラーに塗られた漁船
→運河の方にメリハリが付く。
→クロスカントリーを走る人に元気を与えられるような景色になる。

生徒8の場合



左上：全体図
右上：ベンチのデザイン
左下：橋のデザイン

【デザインのアピールポイント】

- (広場全体)
- ・円形→シンボルである川を中心にコミュニティが広がっていくように
 - ・広場の上部の左右に森林→川から森がトンネルのように見える。
 - ・木を不規則に配置→自然な雰囲気(ベンチ)
 - ・ベンチの中央に木→日陰効果&自然との調和
 - ・木目調の椅子→温かみのある雰囲気
 - ・濃い色→落ち着きがある。
 - ・円形→柔らかみを出して心地よさを出す。(橋)
 - ・かもめの形→海の近くにある広場のシンボルに
 - ・白色の橋→明るい印象に
 - ・木目調の道→温かみのある雰囲気

生徒9の場合



左：全体図
右：植栽のデザイン



【デザインのアピールポイント】

- ・緑や茶色など自然をイメージした色や桜の暖色
→住宅街の中で少しインパクトを感じられる。
→落ち着いて休憩したり、遊んだりできる。
- ・植物などの自然を多く取り入れ、人工物を減らす。
→富山湾が近いことに加え、自然をより感じることができる。
- ・小高い丘のある広場
→広い富山湾を眺めることができ、開放感を感じられる。

「広場の用途」「周りの環境との調和」「利用者の気持ち(視線や動線)」の三つの視点をどこまで造形的に深く考えたのかによって、造形的な工夫の多さ、広場全体の一体感、デザインの独創性に差が生まれた。「広場の用途」の視点を強く意識し過ぎた生徒は、広場全体の造形的な工夫が少し弱い傾向にあり、施設の充実の方に意識が向いてしまっていた(生徒5,6)。「周りの環境との調和」を強く意識した作品は、独創性が抑えられる傾向にあった(生徒9)。一方、「利用者の気持ち」の視点を強く意識した作品は、独創的な作品が多かった(生徒3,4)。しかし、「周りの環境との調和」が意識できていないと、個々の建造物の特徴に統一感がなく、広場全体の一体感が薄れる傾向にあった(生徒8)。三つの視点をバランスよく意識している作品(生徒1,7,8)も見られたが、コンセプト図を一つの作品として美しく仕上げることができた生徒は数人に限られた。

実践事例1から2へのつながり

異なる題材での学びを結び付けるため、「空間との関係性」(実践1:その場所に描くことによって生じる作品の意味、実践2:周りの環境と調和した造形の工夫)を共通の視点として設定したが、学びをつなげることでできた生徒は一部に留まったように思われる。学びをつなげることでできた生徒は、バンクシー作品の鑑賞において、空間がもつ意味と細部の表現に込められた意味を組み合わせ、作者の意図を解釈しており、周りの空間との関係性を意識して、広場にある構造物の色や形を考えていた。学びを十分につなげていない生徒は、利用者が楽しめるか否かのみを考え、世界観が統一されていない作品を考える傾向にあった。

授業で制作された作品だけを見ると、前の学習での学びが生かされておらず、「深い学び」を実現できなかった生徒が多かったように思われた。しかし、事後レポートの内容を見ると、造形的に解釈している生徒が多く、それぞれのレベルで「深い学び」を実現することができたようである。授業で得た知識を基に、自分なりの意味や価値観を形成するために必要な時間は、生徒によって異なるため、さまざまな評価物から生徒の「深い学び」を見取る必要があるだろう。

〈事後レポートにおける生徒の記入例〉

生徒⁵のレポート

公園の周りに家等の高い建物がそんなになく、滑り台やジャングルジム等の高さのある遊具が目立っているように感じる。その反面、見方を変えれば遊具が孤立しているようにも見える。周りにかなり暗めの淡い色が多い中、奇抜な黄色と青のみが遊具に取り入れられているため、孤立して見えるのではないかと、遊具の色の彩度をもう少し落として、よりいろいろな色を使うと寂しい感じが薄れ、周りの景観と合うように思う。

高い遊具により目がいき、子供が遊ぶ気が沸き立つと思う。けれども、遊具が少ないため、一回来ただけで遊び尽くしてしまい、飽きやすい。もう二、三個程度、遊具を増やした方がよいかも。遊具と遊具の間をかなり空けることで、ゆったりと過ごすことができるのではないかと感じた。

※授業で制作した作品では、周りの環境との調和を造形的に考えることがやや弱かったが、事後レポートでは授業よりも造形的な点に注目して考察している。

生徒⁷のレポート

庭園の草木が丁寧に刈り込まれ、管理されていたので、形がとても美しいと思った。アーチ状のバラや道の両サイドに生えるバラなど、園内は西洋風の造形になっており、遠くに見えるタワーやビルなどの建築物の緊張感、規則性、人工的な部分とマッチして統一感があった。公園自体は上から見ると細長い長方形の形をしていて、バラ園や噴水のある場所等、きれいなシンメトリーになっているところもあれば、ただ芝生が広がっていたり、低めの

木が生えているところもあつたりと、メリハリがあり、且つシンブルな作りになっていた。あえて何も無い空間をつくることで、物理的にも精神的にも余裕ができてリラックス効果につながるのではないかと思った。自分で広場をデザインしたときにはあまり意識できていなかったが、余白をつくることは安らぎを与えるうえで非常に重要なポイントになってくるのだということに気付いた。

公園の形が真っ直ぐで開けた空間になっていることと、海の爽快感あふれる青色が合わさることで、清々しさが生まれるのではないかと思った。利用者に魅力を感じてもらえる広場をつくる上で大切なことは、その広場で人々が落ち着くことができたり、体を動かしてリフレッシュできたりすることであり、そのような広場を考えるときに、今まで美術で学習した「余白の美」「西洋の美」「色や質感を与えるイメージ」などを踏まえてデザインすることが大切になってくるのだということを実感した。

※授業で制作した作品は、主に色の工夫が目立ったが、授業を通してさまざまな表現に触れたことで、視野が広がり、他の造形要素にも注目することができるようになったのだと思われる。特に構成の工夫については、これまでの学びを生かして考察しており、美術が生活の中でどのように活用されているのかに気付くことができている。

<課題>

実践を通して、学びをつなげていくためには、共通の視点を設定することよりも、どのような題材においても、作者の意図や思い(鑑賞者・使い手が受ける感情)と造形的な表現の工夫を結び付けるという意識を生徒に確実にもたせることが必要であることが分かった。このような意識は、短期間で身に付けられるものではない。3年間のカリキュラムの中で、段階的に美術を広く捉えていく(個々の作品→生活の中の美術や美術文化)としても、感覚的に捉えたものと造形的な視点をもって捉えたものを常に結び付けた状態で、自分の考えを形成できるように、生徒を育てていく必要がある。題材全体の振り返りを工夫するなどして、この課題に対する改善策を引き続き、検討していかなくてはならない。

視点② 「見方・考え方」を働かせる「問い」

<成果>

実践2において、美術作品として普段捉えていないものを取り上げたことで、個人の感性や想像力と造形的な視点で得たことを結び付ける工夫の重要性が、より明確になった。

実践事例2

これまでの実践では、授業者が問いを通して生徒に気付かせたい事柄が、視覚的に捉えやすかったため、「造形的な見方・考え方」を働かせて、自分の考えを形成する

生徒が多くいた。しかし、実践2で取り上げた広場（公園）は規模が大きく、さまざまな要素（ベンチ、電灯、遊具等）が多くあり、どこに注目すべきなのかが分かりづらいものとなっていた。また、授業者が生徒に投げ掛けた問いの大半が、「造形的な見方・考え方」を働かせるための効果的な問いになっていなかった（資料1）。そのため、鑑賞の活動では、広場の構成物の特徴を挙げるのみで、広場全体のイメージとの関係性に深まっていかなかった。表現の活動においても、個々の構成物の造形は工夫するが、広場全体の世界観を作り上げることができていなかった。「造形的な見方・考え方」を上手く働かせることができず、造形ではなく、設備面のみを考えようとする者もいた。

〈資料1 実践事例2における問い〉

1 時 間 目	①「広場の目的や機能とは、どのようなものだろうか？」 ②「この公園（富岩運河環水公園）を訪れた人は、どのような気持ちになるだろうか？」 ③「この公園に人々が集うのは、どのような工夫があるからだろうか？」 ④「人々は何を求めて、この公園に集うのだろうか？」 ⑤「癒しや安らぎが感じられるのは、どのような工夫があるからだろうか？」
2 時 間 目	①「周りの環境との調和、独創性という視点で、三つの公園を捉えてみよう。」 ②「どのような特徴に、周りの環境との調和を感じるだろうか？」
3 時 間 目	①「それぞれの立場に立って考えると、富岩運河環水公園のデザインは本当によいものなのだろうか？」 ②「この光景（広場に立ったときの光景）を見たとき、利用者はどのように感じるだろうか？」

〈課題〉

この実践では、生徒の思考や感情の動きに沿って問いを構築するという点において、吟味が足りていなかった。4年次の研究において、生徒の思考や感情に沿った問いの展開に課題があることが分かっていたが、この実践で改善策を打ち出すことができなかった。本題材の問いはいずれも、造形的に対象を捉えるきっかけが示されておらず、「造形的な見方・考え方」をどのように働かせればよいのか分からず、漠然とした問いになっている。そのため、生徒から出た意見の中には、造形的な視点を欠くものがあった。例えば1時間目の③の問いでは、「有名チェーンのカフェがあるから」という考えをもつ生徒が多

くいた。この状況に対して、「カフェがないと、この広場の魅力はなくなってしまうのか?」「カフェの外観と広場全体のイメージとの関係はどうか?」などと、切り返しの発問をしたことで、造形的に考える生徒が少し増えたが、授業者の想定が甘かったことは否めない。生徒は対象を見て何を感じるか、授業者は生徒に何を感じ取らせたいのかを明確に整理した上で、問いを構成すべきだった。

① 造形的に考えを深めさせるための言葉

2時間目の発問では、「周りの環境との調和」という視点を生徒に提示したが、「調和」の解釈を深める必要があった。富岩運河環水公園と共に提示した二か所（小樽運河公園、流山運河水辺公園）の公園も植物の緑がある公園だったため、多くの生徒が「周りの環境との調和」＝「自然の緑を多く取り入れる」と認識していた。そのため、コンセプト図の制作では、多くの生徒が植物の緑を取り入れただけで、「周りの環境との調和」を工夫していると錯覚してしまっていた。周りの環境と調和している状態とは、どのような状態なのか、生徒とのやり取りを通して、解釈を深めるべきだった。造形的に捉えることができた生徒でも、「調和」を色でしか考えることができず、形や構成、材質等、さまざまな造形要素に注目させる必要があった。今回の実践では、「なぜ、植物の緑があれば、周りの環境と調和していると言えるのか?」などと、切り返しの発問をすればよかったかもしれない。

生徒の考えを広げさせるために、考えが限定されるような言葉は避けるべきだが、漠然としすぎても、造形的な視点が欠けてしまい、解釈が偏ったものになってしまう。授業者から定義を示しつつも、生徒と共に造形的な解釈を深めることができるような言葉を厳選する必要がある。

〈ワークシートの記述例〉

※「調和」を造形的に解釈できた生徒の記述を厳選した。

【富岩運河環水公園】

- ・人工物や直線的なものが多く、周りの住宅地と調和している。
- ・曲線的な形を上手く使うことで、自然と調和している。
- ・茶色や白色等、緑色より目立たない色、自然物になじむような色を使っているため、調和している。

【小樽運河公園】

- ・近くに流水のある海があると考えると、白色を基調とした清潔感のある空間になっている。
- ・色相が統一されており、建造物が主張しすぎている。

- ・白色のタイルや建物等、白色を基調としていて、メルヘンチックなおしゃれな印象が自然の豊かさと調和しているというよりも、自然がそれを引き立てているように感じる。

【流山運河水辺公園】

- ・自然に溶け込む、あたたかみのある色が使われている。
- ・明度の高い色の塔が、周りの自然の色に合っておらず、違和感がある。
- ・独創的な印象が深まるかもしれないが、明るい黄色やオレンジ色等が建造物に使われており、色味の主張が強い。

② 問いと連動した作品

1 時間目の導入では、普段何気なく見ている公園を美術的に解釈できることに対して、生徒は驚きをもって、作品を鑑賞していた。しかし、その後の展開において、生徒の感情を大きく動かすような作品の提示を行わなかったため、生徒の関心が薄れてしまったように思われる。実践2の後、別の題材「時代や社会と美術（戦争画の鑑賞）」では、作品提示の仕方を工夫し、問いを考えたことで、生徒の中に生じた感情を生かして、「造形的な見方・考え方」を働かせることができた。この授業で取り上げた《虹》（丸木位里・俊夫妻作《原爆の図》シリーズより）、《神兵パレンバンに降下す》（鶴田吾郎作）は、作品の提示の仕方を工夫したことで、生徒の中に「違和感」を生じさせることができ、深く作品を見たいという思いをもたせることができた。《虹》は、タイトルの言葉がもつ明るいイメージと暗い作風との間に相違があり、《神兵パレンバンに降下す》は、牧歌的な空の表現と陰しい表情をした兵士の表現との間に相違がある。特に《神兵パレンバンに降下す》は、沖縄修学旅行での事前学習もあり、生徒に大きな衝撃を与え、なぜ作品上部と下部の表現が対照的なのか、作者の意図に深く迫ろうとする生徒が多かった。美術科においては、生徒の感性や想像力と「造形的な見方・考え方」が連動する必要があるのかもしれない。「造形的な見方・考え方」を働かせる問いを考えたときは、問いの言葉だけでなく、提示する作品と作品の提示の仕方を十分に吟味することが重要であることがより明確になった。

③ 与える視点の順番

実践2の題材では、生徒に考えさせたい視点として、「広場の用途」「周りの環境との調和」「利用者の気持ち（視線や動線）」を設定し、この順番で作例を示しながら、生徒に視点を与えていった。しかし、この順番は効果的

ではなかったように思う。「広場の用途」「利用者の視線や動線」の視点で考えさせたときに、生徒から出た意見の多くはバリアフリーの視点からの考え（例：段差が低いから、高齢者や幼児が転びにくい。手すりが付いているから、高齢者が安心して歩くことができる。）であり、生徒は「造形的な見方・考え方」を働かせていなかった。生徒が広場を美術作品として造形的に捉えることができたのは、「周りの環境との調和」「利用者の気持ち」の視点に気付いたときであり、周りの建物や自然風景の色との相性、利用者が安らげる色や形のイメージといった、「造形的な見方・考え方」を働かせた意見が出された。本題材では、機能的な面しか見ていないものを造形的に捉えることができると気付いたときに、生徒の気持ちが大きく動いたはずである。よって、「広場の用途と造形の関係性」「利用者の気持ちと造形の関係性」「周りの環境との調和と造形の関係性」の順に考えていけるよう、問いを組み立てるべきだっただろう。

（授業者：宮田苑佳）

5 実践研究のまとめ

美術科で5年間実践してきた題材、学習内容は以下の通りである。（研究紀要掲載の授業のみ）

評	題材名	ねらい
1 年 生	1年次：互見授業 「君は何を感じる？—モネ作品の魅力を探ろう—」 （絵画／鑑賞）	モネとルノワールの比較鑑賞を通して、造形的な要素と、作者の心情や意図と表現の工夫を関連付けて、作品の魅力を考えることが必要ということを理解する。
	4年次：研究発表 「私の視点—『印象、〇〇』私が感じた風景の魅力—」 （絵画／表現） ※1年次の互見授業を再編成	風景の魅力を表現するため、意図に応じて、色、構図、描き方を工夫し、作品を生み出す。
2 年 生	2年次：研究発表 「日本の美意識を探る—枯山水の箱庭制作—」 （鑑賞）	鑑賞や箱庭制作を通して、構成の工夫に注目しながら、枯山水庭園の魅力を感じ取っていくことで、枯山水庭園に見られる「日本の美（日本らしい美）」を自分なりに解釈する。
	3年次：通常授業 「メッセージを伝える—附中ロゴマーク制作—」 （デザイン／表現）	附属中のよさをわかりやすくシンプルに伝える、印象的なロゴマークを作り出す。
	4年次：通常授業 「文化財保存の在り方を考える」 （彫刻／鑑賞）	現状の阿修羅像と復元された阿修羅像の比較鑑賞を通して、時代ごとの美意識の違いを感じ取り、文化財がもつ美しさや魅力について、考えを深める。
3 年 生	3年次：研究発表 「時代や社会と美術—社会に問うパブリックア—	時代や社会の流れと作者の意図や美術表現との関係を理解した上で、時代や社会の流れの中で感じ

3 年 生	ト一 (絵画/表現)	たことや考えたことを鑑賞者に効果的に訴えかける、深い意味のある作品を生み出す。
	5年次：通常授業 「空間を意識した現代アート」(絵画・インスタレーション/鑑賞) ※3年次の研究授業を再編成	作品が存在する空間と作品の関係性に注目し、空間を生かした表現の工夫や作者の意図について考えを深める。
	5年次：研究発表 「安らぎの空間一人と自然の憩いの場一」(デザイン/表現)	周りの環境を生かした広場の造形的な美しさを感じ取り、生活を美しく豊かにする美術の働きについて考えるなどして、都市デザインに関する見方や感じ方を深める。
	5年次：通常授業 「時代や社会と美術(戦争画鑑賞)」(絵画/鑑賞)	時代背景と造形的な特徴との関係性に注目し、作者が作品に込めた思いについて考える。

視点① 「深い学び」を実現する単元構成

学びをつなげることで、美術科の「深い学び」を実現できると考え、この5年間は「学びのつながり」を意識し、実践研究を行った。例えば、鑑賞と表現の活動における学びのつながりや、絵画・彫刻とデザイン・工芸の学びのつながりを実現するため、共通の視点を設定するなどの工夫を行った。また、3年間のカリキュラムを意識し、生徒に考えさせる対象を、個人の思いから生まれる美術表現から、他者の思いも踏まえた美術表現、美術文化や生活の中の美術へと、3年間の学びをつなげ、徐々に美術を広く捉えていくことができるように授業の構成を考えた。これらの実践によって、生徒にさまざまな局面から美術を捉えさせ、見方や感じ方を深めさせることができたように思う。

美術科における「深い学び」の状態に到達するためには、自分自身と向き合い、造形的な視点をういながら無意識だった部分を意識化し、自分の考えを造形作品や言葉で表現しなくてはならない。5年間の実践研究を通して、個々の活動における学びをつなげ、「深い学び」を実現させるためには、自分の学びをどのように振り返らせるかが重要であることが明確になった。今後も、効果的な振り返りの在り方については研究の余地があるだろう。

視点② 「見方・考え方」を働かせる「問い」

5年間の実践研究の中で「造形的な見方・考え方」が上手く働いた場面は、生徒の感情が大きく動いた場面であった。特に「君は何を感じる？」(1年次)、「日本の美意識を探る」(2年次)、「時代や社会と美術」(5年次)

では、生徒の中に「違和感」をもたせたことで、生徒は積極的に作者の意図に迫ろうとし、表現に込められた意味を深く考えることができた。

生徒自ら、Why 型の問い(鑑賞の活動)や How 型の問い(表現の活動)を立てることができたならば、「造形的な見方・考え方」を自然と働かせることができる。実践研究を通して、美術科では「造形的な見方・考え方」のみを働かせるのではなく、それと共に個人の感性や想像力も働かせる「問い」が必要であることが明確になった。授業者が深い解釈が可能な作例を示し、生徒の感情が大きく動くような適切な場面で、新しい視点を与えるような発問をすることができるよう、授業者が発する問いについては引き続き、研究していきたい。